

# 「牧野富太郎の道を歩く」における ツーリズムデザインのあり方とその評価

羽藤英二<sup>1</sup>

<sup>1</sup>正会員 東京大学 (〒123-8656 東京都文京区7-3-1, E-mail:hato@bin.t.u-tokyo.ac.jp)

本研究は、ツーリズムデザインについてその背景となる旅行者-住民モデルの枠組みを提案し、旅行者のツーリズム参加による価値のについて、住民との関わりありの中で定義づけを行った。その上で、ツーリズムデザインにおけるデザイン言語の概念を示し、実際のツーリズム実践の場におけるケーススタディを通じて、こうしたデザイン言語に基づいた実践活動推進の内容を説明し、考察を加えた。

キーワード: ツーリズムデザイン

## 1. はじめに

費用便益分析でネットワーク整備の経済効果を算出する場合、道路整備による所要時間短縮とあわせて二次産業が立地するといった経済的行動原理の仮説を含むことがある。しかしながら実際に道路ができて使う人がいない、何のために造ったのだという批判的文脈が巷には溢れており、中長期的な経済振興を目指した道路整備を、縮退していく国土の中でこれ以上進めていくことについて大きな疑義が示されつつあるといえよう。自動車文明を前提に国土軸を高速ネットワークで結ぶ国土像がかなり多くの維持管理コストを必要としており、人口減少・高齢化を迎えるわが国でこれ以上の道路整備を、どのような原理原則で行っていくかは不透明である。

もちろん現実に社会資本整備を生業としている多くの地方では、道路整備なくしてやって地域が成り立っていない場合も多い。しかしこうした道路整備不要論を完全に棄却することは困難であろう。

こうした観点に立つなら、道路をどう作るかはもちろん大事だが、新しくできた道や既にある道路をどう生かすかという視点に立った計画論が求められているのは間違いない。たとえばフランスの高速道路建設にみられるような1%施策の試みなどは注目に値するであろう。1%施策とは、高速道路そのものを建設するだけでなく、その周辺地域の発展に資する事業に用いられるものである。地方における道路整備事業を真に生かすための仕組みづくりの目的は、地域性を生かした生業と豊かな生活景の再生に行き着くものであり、こうした観点から、地産地消の考えに基づいた地域ツーリズムが注目されている。愚弄的には、風景街道や道普請といった国内施策や、欧州におけるモーツァルトの道のような施策が進められて

いる。従前のマスツーリズムとは異なり、地域自らがどのようにツーリズムの仕組みを構築していくかが問われており、こうした活動はコミュニティの再生の試みとしても捉えることもできるだろう。

ツーリズム研究においては、観光需要予測を精緻な数理モデルを使って行うような研究アプローチが存在する。こうした方法論はインフラ整備の費用便益分析を行う上で必要かもしれないが、ツーリズムそのものを設計するには十分とはいえないだろう。ツーリズムにおいて重要となる観光資源をどのようにみつけ、磨くべきなのか、あるいはどのように運営していけばいいのかが求められている。地域性を生かしたツーリズムデザインを考えていく上で、こうした諸相をモデルの中に明示的に取り込んでいくことは難しく、複眼的な観点にたち、既存の社会資本整備と一体的にツーリズムデザインを考えていくことが重要となってくる。

ツアーが旅行業者などが取り扱う商品化されたサービスであるのに対して、ツーリズムは、ツアーを作り出し実践する仕組みや考え方そのものである。地域に対して何らかの利益や貢献のあるツアーを作り出し実践していくことを意味しており、本研究では、こうした地域性を生かしたツーリズムをどのようにデザインしていくべきかについて、実践を通じたその手法論の評価を試みたいと考えている。

## 2. ツーリズムの概念整理

旧くはローマ帝国の時代からエリートのための特権的な遊びと文化のための旅行が行われてきた。15世紀には巡礼が大衆化し、わが国においてもお伊勢参りや四国遍路などが旅行案内の普及とともに一般化した。こうした

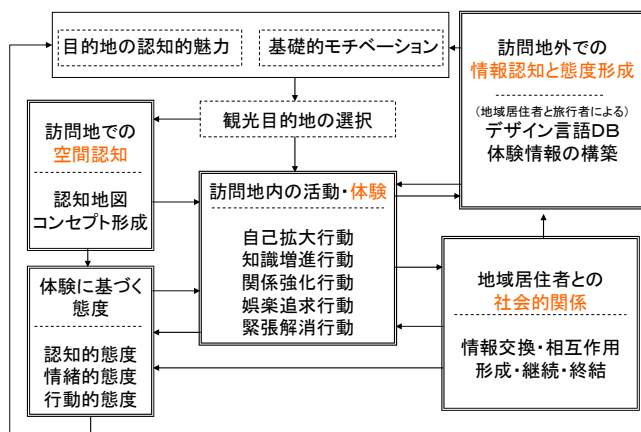


図-1 旅行者の意思決定プロセス

ツーリズムの流れは明治維新後も続き、車社会の到来と共に、車による個人旅行と大型バスを使ったマストツーリズムが大いに流行する。過疎化の進行と公共事業による地域活性化公共事業が一体となって、大規模リゾート計画が実行に移されていった。計画の時間スケールが急であったことに起因して、先に述べたような地域における大規模な公共事業依存型経済という弊害が顕在化していくことになった。作られた道路を使った新たな地域経済の再生は遅れており、その端緒となるような地域性を取り込んだ自立可能な体験型ツーリズム論の確立が求められているといえよう。

従来のツアーが、とりあえずツアーをつくり、販売、観光客を集める仕組みであったのに対して、体験型のツーリズムでは、その地域でしかできない体験を通じて、地域振興と観光振興を持続可能な形で実現する仕組みである。そのプロセスでは地域自身によるデザイン、実施、モニタリング・評価のプロセスの確立が重要となる。造りっぱなし、やりっぱなしからの脱却が何よりも求められており、また同時にその地域に固有の地域性の読み込み、物語化、体験のデザインコンセプトづくりをどのように進めていくかが重要になる。「その地域での体験」がコンテンツとなるのであれば、自然環境や地域社会の事情を熟知している地域自身がマネジメントの主体とならざるを得ない。そして、どうマネジメントすべきかについては地域の物語をゾーニングし、情報を強化し、補強と誘導を行うことで物語を強化していくことが求められるのではないだろうか。

### 3. ツーリズムにおける旅行者-住民モデル

ツーリズムデザインにおいて、地域に固有の物語を見出し、これを再整理したうえで、ツーリストと物語の間に何らかの対話をもたらされることが必要である。ツーリズムというものが地域コミュニティと切り離せないも

表-1 活動の経緯

日時	内容
2006年10月	風景づくり講演会開催
2007年 4月	夜桜音楽会の開催
2008年 8月	牧野富太郎の道の調査実施
2008年 3月	植物観察会の実施
2008年 4月	夜桜音楽会の開催
2008年 8月	牧野富太郎の道の調査実施
2008年10月	風景資源調査の実施
2008年11月	植物観察会の開催 牧野富太郎の道を歩くツアーの開催
2009年 2月	牧野植物園との連携協議
2009年 4月	牧野富太郎の道を歩くツアーの開催 夜桜音楽会の開催

のであるならば、こうした小さな物語を見出し、紡ぐためのデザイン言語の確立が重要であろう。なぜなら、ツアーという体験を設計し運営していく主体となるのは地域住民であり、デザイン言語は、彼らが自ら地域資源を発見し、これをデザインしていくための手がかりとなると考えるからだ。たとえば、「グランドキャニオンやイエローストンのような圧倒的自然」を目の前にしたとき、「保護」が第一義となるだろう。この際重要になるのは、対象化され「保護」された自然をどのように体験させるかということであり、利用者の体験プロセスの詳細に目を向けることが求められる。地域における個々の場面と要素の関係を物語として再定義し、デザインすることで、新たに起こる人の継起的・連続的な場面との対面は体験として自身に迫り、そのことによってツーリストの意識に変化を起こさせるだろう（図-1）。

観光における目的選択は、目的地的認知的魅力と基礎的モチベーションによって定義される。目的地的認知が選択された後、実際に空間を動き回ることによって空間認知が行われ、ツアーコンセプトが形成される。コンセプトに基づいて活動が選択され、その活動が地域居住者との社会的関係を経ることで、1) 緊張解消、2) 娯楽追求、3) 関係強化、4) 知識増進、5) 自己拡大といった活動・体験の深さや満足度が大きく変化する。もちろんこうした体験は個人の認知的、情緒的、行動的態度をも変化させ、変化した態度が活動や体験そのものを大きく変化させることになる。個人の欲求は単一のベクトルをもっていない。ツーリズムによって得られる体験そのものは、地域居住者との社会的関係と交流を通じて行われることで、より複合的な満足度をもたらす。こうしたプロセスにおいては外部情報が重要な役割を果たす。外部情報は旅行者と地域住民が意図的/非意図的に作り出すもので、これによって訪問地の外で観光地に初期態度や認知が形成・更新されることになる。同時に高度にデザインされた外部情報は、体系的であり、訪問地にいる間も段階的

HOME 牧野富太郎について イベント 植物図鑑 投稿

# 牧野富太郎の道歩く。

## 牧野富太郎について

### 高知で過ごした少年期

牧野博士は文久2年(1862年)土佐国(現高知県)高知郡(現高知市)に生まれ、大の植物好きで、一人旅先で草木と遊ぶ少年であった。高知の街から千里を歩き、その旺盛な好奇心から幼少で種々多量な植物を採集していた。そして植物の採集、植物採集や植物の名前・植物図鑑を自ら学んでいった。そして「日本中の植物を調べるために、まずは高知県の植物を調べよう」と考え、明治14年(1881年)から同年にも遡り、土佐の植物を採集して回った。その採集の成果として、明治14年に高知市大月町に植物採集の日記や文庫などを記述している。その日記で、土佐の豊かな自然環境として植物採集の日記、採集と写生、観察による果実を基本とする植物分類学の基礎を作った。



### 東京で研究に励んだ青年期

その後、植物の正確な知識を得るために多くの旅人・文藝家と知識が広まった。牧野博士は東京に移り住むことを決意した。上野の園芸学校で農科大で植物学を専攻し、日本中を旅し、数多くの新種を発見していった。そして22歳のとき日本で初めて新種「マダガスカル」を発見した。1890年(明治23年)に東京大学農学部植物学専攻科に入学し、その後は植物学専攻科で学び、世界有名な植物学者として大きな功績を残した。そして「植物学専攻科」を卒業し、東京大学農学部植物学専攻科に入学し、その後は植物学専攻科で学び、世界有名な植物学者として大きな功績を残した。そして「植物学専攻科」を卒業し、東京大学農学部植物学専攻科に入学し、その後は植物学専攻科で学び、世界有名な植物学者として大きな功績を残した。



### 植物知識の普及に努めた壮年期

研究や採集の成果、図は一般の人々も参加できる植物採集会を組織し、植物採集の楽しさを広げた。それだけでなく、自然環境についても多くの知識を蓄えていった。それだけでなく、自然環境についても多くの知識を蓄えていった。それだけでなく、自然環境についても多くの知識を蓄えていった。それだけでなく、自然環境についても多くの知識を蓄えていった。



### 牧野博士の思い

牧野博士は「世界の知識を学び、応用するだけでなく、自然環境についても多くの知識を蓄えていった。それだけでなく、自然環境についても多くの知識を蓄えていった。それだけでなく、自然環境についても多くの知識を蓄えていった。それだけでなく、自然環境についても多くの知識を蓄えていった。」

### 大月町・三原村における牧野富太郎の調査経路及び植物リスト

「土佐は自分の国だから方々行きましたが、郷土はすべて一巡しました。花にも何にも珍しいものがある、あんなのも初めて見た。」

明治14年9月	15日 高知	16日 大月町	16-23日 大月町	24日 大月町	24日 大月町	25日 大月町
明治22年8月	4日 大月町	5日 大月町	5日 大月町	5日 大月町	5日 大月町	5日 大月町

沼津	オガタマ タモオオシロ ヨコギ
編笠	ニホヒコノオオシロノフ オガタママカキ フチノイネゴロハヒンダン ハマスノキ
安濃町	シロクサ(オオクサ) ハウスノキ ハマスノキ 地蔵ノキ(オオクサ) ヨシノキ(オオクサ) ヨシノキ(オオクサ)
大宮海岸	オウゴン(オオクサ) シロクサ(オオクサ) ハウスノキ
徳島	ヤマシロコモシロクサ シロクサ(オオクサ) オガタマ
阿波郡	オガタマ アツクサ(オオクサ) ハウスノキ
あま	オガタマ(オオクサ) ハウスノキ
オウ	オガタマ(オオクサ) ハウスノキ
徳島の木	ヒナノカシ フシノキ タニノキ ナルコエ ミヅカノ
今山	ハリスノキ(オオクサ) オウゴン(オオクサ) シロクサ(オオクサ) ハウスノキ(オオクサ) ヨシノキ(オオクサ) ヨシノキ(オオクサ) ヨシノキ(オオクサ)

HOME 牧野富太郎について イベント 植物図鑑 投稿

図-2 牧野富太郎の調査工程の紹介 (ポータル)

に旅行者に働きかけることで、訪問地内の活動や体験を誘引し、強化する役割を持つ。

このように、地域性をデザイン言語としてうまく定義した上で、地域住民の中で共有化すること、共有化した

デザイン言語をもとにツーリストの体験に随伴している充足ベクトルを踏まえてツーリズムを構築していくことが求められている。

#### 4. ツーリズムデザインのケーススタディ

##### (1)大月町・三原村の概要と経緯

大月町と三原村は高知県北部に属し、県庁所在地である高知市からは車で3時間程度かかる地域であり、人口は6437人(大月町)、1808人(三原村)である。当該地域で行われているツーリズム活動を表-1に示す。

複数の専門家と地域住民、行政関係者が講演会において出会ったことで(2006年10月)活動がスタートしている。幡多郡は黒潮と瀬戸内海の影響を受け、気候が温暖で植物種が多いことが知られているが、地域の風景資源について掘り起こしを行った結果、牧野富太郎が発見したとされる足摺桜が大月町で発見され、希少種である足摺桜をひとつの資源としたツーリズム活動がスタートした。当初イベントを行い、希少種である足摺桜を観てもらうツアーが設計され実施に移される。その後、牧野富太郎に関する人物史調査が行われ、研究日誌からは地域におけるフィールドワークの足取、スケッチ、発見・採集した植物の名前が明らかになった。こうした情報を下敷きに、当時、牧野富太郎が歩いた道を含む山道の手入れが行われ、現在は、牧野富太郎植屋外植物公園を目指した活動が地元の人々を中心に行われている。

こうした活動においては、ツアーガイドを育成するための講座、携帯電話などを利用したツーリスト向けの地域版植物図鑑の開発、牧野の研究日誌調査の実施(図-2)、小規模宿泊施設の広域連携などが行われている。

##### (2) ツーリズム活動の特徴

ツーリズムデザインを行っていく上で、デザイン言語とでもいうべきものに、果たして何か定まったものがあるのかといわれれば難しい。しかし、本来体験型ツーリズムのようなものは地域性と深く密着したものであるべきだし、そうした場合、よいツーリズムをデザインしていく上でよりどころとなるようななんらかの「要素」や、「要素」間のつながりを現す「文法」のようなものが必要になるであろう。アレグザンダーのパターンランゲージを引用するまでもなく、こうした「要素」と「文法」には普遍性があると思われるが、一方で、地域性をより記述し得るデザイン言語を見出し鍛え、これを使いながらツーリズムデザインを展開していくことが重要である。なぜなら体験型ツーリズムが地域の内外で持続可能な形で展開していくためには、図-1に示すような様々な主体によって行われる活動中のコミュニケーションの中でど



図-3 牧野富太郎の研究日誌

のようなデザイン言語が用いられるかは重要だろうし、ツーリズム活動の根幹をなすといってもよいからだ。単純に地域風土を顕す素材を選ぶだけでなく、その素材をめぐる歴史や人物、空間的な配置をもたらす豊かな関係性を普遍性と固有性に配慮しながら頑健で柔軟なデザイン言語として定義する必要があることは明らかだ。経済原理に基づいた普遍性の高い言語も重要かもしれないが、地域風土を読み込むことで初めて得られたデザイン言語で語られるツーリズムには持続性があると考えられる。

ここでは、まず「足摺桜」と「牧野富太郎」という2つの「要素」をツーリズムのためのデザイン言語として拾い上げた。「足摺桜」はまさしく実態として見つかった伝説の山桜であり、「牧野富太郎」は高知県出身の地元では知らぬ人のない著名な植物学者である。この二つの「要素」は地元によく知られ、一般的な価値が高い。地域を主体としたツーリズムデザインでは、「足摺桜」の発見によって結びつけられた「牧野富太郎」をキーに、「牧野が見出し命名した植物」と「牧野がかつて歩いた道」をかつての記憶と共に自分たちの力で再生させるというプロセスを考えた。

実施にあたっては、幡多郡が「牧野富太郎」が初めての本格的な植物調査旅行地として選んだ地域であることから<sup>i</sup>、本人が発見・命名した植物種も多く、本人が命名した植物種と、目にしたであろう植物を、研究日誌を資料として整理した。さらに調査旅行における牧野の調査経路を十分踏査し、牧野が歩いた道の殆どが、今では森の中に埋もれてしまっていることを確認した。こうした道はかつては小学校の通学路として使われており、道沿いには石積みや田圃跡や果樹園跡が見られることが明らかとなった。地域に居住している高齢者の中には、かつてこの道を使って小学校に通ったと答える人も多いことから、再生可能な道について、地元有志に声かけを行い、草刈を行うことでツーリズムにおける主要な遊歩道として用意することとした。



図-4 地域植物図鑑の仕組み

次にツーリズムにおける知識増進機能と関係強化を目的として、携帯電話とQRコードを利用した地域植物図鑑を開発に取り掛かった。牧野植物園との協議により専門家の協力を得て、地域の植物調査を実施し、地域住民の生活体験から食し方や遊び方についても調査し、データベースを作成した。さらにツアー参加者が写真を撮ることで自ら植物図鑑をつくれる仕組みも容易した。絶滅危惧種については、掲載を避けるなどに配慮したうえで、道の駅と連携したツアーを実施している。こういったツーリズム活動は大月町と三原村という二つの地域をまたがる地域で行われている。大規模な宿泊施設を有する大月町と、農家レストランなどの企画力のある三原村では互いに補完作用があると認識されており、多くのイベントが宿泊回遊型で企画運用されている。

### (3) 評価と考察

こうしたツーリズム活動によって実施されたツアー評価については、ツアー参加時、周囲の人と話した内容の51%は植物に関するものであり、地域資源をキーにしたコミュニケーションが成立しているといえる。またイベントで覚えた植物の平均数は約4種類と知識増進・関係強化機能が充たされていることが伺える。一方で持続可能な取り組みと考えたとき、雇用の側面からどのようなモデルが考えられるかを同時に考えていく必要があると考えている。

<sup>i</sup> 幡多群の湿潤温暖な気候は多様な植生を生み出し、黒潮と瀬戸内海の影響を受ける多相的な気候から特に植物種が多いことが影響したと思われる。国際学会における植物の学名の命名権を持っていなかった日本ではあるが、海外の研究者との交流によってその機会が生まれつつあり、新種の発見は何より学問的な価値が高かったという学術的背景がある。